東京大学大学院新領域創成科学研究科
環境学研究系自然環境学専攻
自然環境形成学分野
平成 25 年度　修士論文

都市郊外部における地域コミュニティの形成に果たしうる参詣講の役割

The potential role of Kou for the creation of suburban communities

2014 年 1 月 23 日提出
2014 年 3 月修了
指導教員　斎藤馨　教授
47-126648　山田修栄

目次

第１章　序論 5
１−１　研究の背景 5
（１）都市郊外部をめぐる地域コミュニティの課題 5
（２）都市郊外部における地域コミュニティの課題 6
（３）都市郊外部における地域コミュニティ形成に向けた方策 7
（４）地縁型組織としての参詣講と地域コミュニティ形成の可能性 7
１−２　学術研究の動向 8
（１）　地域コミュニティに着目した研究 8
（２）民俗学，宗教学の観点から講を扱った研究 9
（３）求められる研究課題 10
１−３　本研究の目的 10
１−４　研究の構成 11
１−５　用語の定義 12
（１）地域コミュニティ 12
（２）参詣講 13
１−６　研究の対象地 14
（１）参詣講としての御嶽講の概要 14
（２）研究対象地 15
第２章　御嶽講の活動実態とその変遷の解明 17
２−１　本章の目的 17
２−２　研究の方法 17
２−３　結果と考察 20
（１）御嶽講の活動内容の解明 20
（２）御嶽講の活動主体の解明 21
２−４　小括 23
第３章　参詣講参加者と他の地域組織との関わりの解明 24
３−１　本章の目的 24
３−１　研究方法 24
３−１　結果 24
小括 26
第４章　御嶽講の活動主体が地域コミュニティにおいて果たしうる役割の解明

……28
4－1　本章の目的 ……28
4－2　研究の方法 ……28
4－3　結果と考察 ……28
4－4　小括 ……31
第５章　総合考察 ……32
5－1　総括 ……32
5－2　既存の研究との比較 ……33
5－3　参詣講が地域コミュニティの形成に果たしうる役割 ……34
5－4　本研究の発展可能性 ……34
5－5　今後の研究課題 ……36
参考文献 ……37
謝辞 ……40
要旨 ……41

図表一覧

第１章

図 1-1. 本研究の構成図

表 1-1. 講の結成目的と種類

図 1-2. 御嶽講で行う活動

図 1-3. 対象地位置図

図 1-4. ３地域における人口推移

第２章

図 2-1. 調査のフロー

表 2-1. ヒアリング対象者と調査事項

図 2-2. 聞き取り調査の様子　2013 年 8 月 19 日

図 2-3. 平成 4 年における 3 地域の御嶽講員所在地

表 2-2. 御嶽講の活動内容

図 2-4. 参加者の年齢構成

図 2-5. 参加者の職業構成

第３章

表 3-1. 聞き取り調査概要

図 3-1. ３地域における御嶽講員の所属する地域組織

図 3-2. 御嶽講参加者の所属する地域組織と役職

図 3-3. 御嶽講の活動内容の変化

第４章

表 4-1. 調査対象者と質問事項

図 4-1. 神社コミュニティの年間の行事

図 4-2. 祭礼の行程と各コミュニティとの関わり

図 4-3. 祭礼運営の組織図

図 4-4. 神輿巡行の様子

図 4-5. 神輿巡行に合わせた囃子会による演奏

第５章

図 5-1. コミュニティのあり方の概念

第１章　序論

１−１　研究の背景

（１）都市郊外部をめぐる地域コミュニティの変遷

都市郊外部は，高度経済成長期から都市部の住宅不足を解消するために開発行為の種地となり住民の転入または転出の多い地帯であった．よって都市郊外部における地域コミュニティはこれまで，時代の流れとともに変化してきた．以下では，大きく高度経済成長期以前と高度経済成長期と近年の地域コミュニティに分けて地域コミュニティの変遷について概説する．

都市郊外部の地域コミュニティは，高度経済成長期から始まる開発行為が入る以前は，都市郊外部は多くが農耕地帯であり，基本的に就業地と居住地が同一の地域の範域内に存在していることが多かった．そのような農耕地帯では，複数の地域組織が同一空間に重層的に近接する特徴を有していた．鈴木（1940）によれば，農村社会における社会集団（本研究では，地域組織と呼ぶ）を行政的地域集団，氏子集団，檀徒集団，講中集団，近隣集団，経済的集団，官設的集団，血縁的集団，特殊共同利害集団，階級的集団の 10 種類に分類でき，農村社会が集団の累積体として表すことができると述べている．また伊藤（1989）においても，農村社会について構成員の重複が存在する様々な地域組織が重層的に重なり合っており，地域コミュニティが構成されていることを指摘している．しかし，高度経済成長期以降により多数の住民が転入してきたことや，生活様式の変化により，地域コミュニティにも大きな変化がもたらされる．

高度経済成長期以降，都市部の住宅供給不足に対応するため，都市郊外部では市街地の開発が行われてきた．そのため都市郊外部は新住民の転入による人口の社会増加を迎える．こうして転入してきた住民は，職場と居住地が完全に乖離した状態となり，平日は地域コミュニティの活動に関わる時間を持てなくなっている．よって地域組織に対する加入もしくは活動への参加頻度が少なくなっている．既存の地域組織の衰退と同時に，新たな地域組織を結成する動きが見られたのも同時代の特徴と言える．団地や新興住宅地で一斉に入居した住民内で結成される地域組織が例として挙げられる．地域組織に関する課題が発生したのは，同時代からであり例えば新規に開発された団地のような新興住宅地では転入してきた住民の間で，コミュニティ形成に関して課題が発生する．斎藤ら（2001）は，主に新住民で構成される郊外型団地内での合意形成過程について考察している．また村上ら（2007）は，団地の賃貸住宅の居住者と分譲住宅の居住者が建替えに対する意向に差異がみられ対立を生んでいることを指摘している．

最後に 1990 年代より，これまでの地縁に根ざした地域組織ではない新しい形の地域組織が結成される動きがみられるようになった．それは，NPO 法人のようなある共通の目的を

共有し，目的達成を指向する地域組織であり，居住地を問わず様々な場所で活動の場を持つ特性を持つ．NPO 法人のようなテーマ型の地域組織は，地域コミュニティが抱える課題に対する解決策として注目されている．しかし，地域組織への参加率の低下や高齢化といった課題があり，地域コミュニティの弱体化はなおも課題となっている．

このように都市郊外部は都市部，農村部と比較して開発圧力が高かった背景から人口の流入が激しく地域コミュニティにおいても変化がとりわけ激しかったことがいえる．

（２）都市郊外部における地域コミュニティの必要性

地域コミュニティが弱体化していることが言われている．本研究で弱体化とは，地域組織に対する加入率の低下や参加者の高齢化や固定化を含む．地域コミュニティの形成による利点についてはいくつか指摘されている．

１点目として挙げられるのが犯罪発生抑制の観点からである．高木ら（2010）は自治会活動に参加する，清掃活動に参加するといった地域コミュニティの活動参加が増えたことにより犯罪発生が抑制されたことを明らかにしている．

２点目として，災害による共助の役割が挙げられる．

３点目として，高齢者の見守りの役割である．高齢者の孤独死が地域コミュニティの衰退により，社会問題として顕在化していることも課題として挙げられる．

４点目として，まちづくりの観点からの必要性である．2000 年以降，自治体の財政状況の悪化を背景とした行政からの動きとして地域組織が注目された.法制度上で景観法(2004 年）における景観整備機構や歴史まちづくり法（2008 年）における歴史的風致維持向上支援法人,都市緑地法(2004 年改正)における緑地管理機構,新しい中心市街地活性化法(2006 年改正）における中心市街地整備推進機構など，まちづくりに関連した組織を認定することを組み込んでいる（石原ら 2010）．ここで地域組織に期待されている役割は，活動の実施主体としての役割に加えてまちづくりを主体的に行っていくために地域全体の課題に対する意見調整としての役割である．藍澤ら（1993）は新興住民・旧住民間の交流がないことにより地域内課題の主体的解決が行われにくいという問題を挙げており，住民意識の合一を行う地域組織活動をコミュニティが行うことが必要であることを述べている．

以上に挙げたように様々な地域コミュニティに関して様々な理由から，その必要性が言われている．現に人口減少時代に突入しており，少子高齢化によって若者が減り高齢者が増えていくという年齢構成の変化が起こっている．広井（2009）は戦後から高度経済成長期を経て，これまでの時代とは一貫して「地域」との関わりが薄い人々が増え続けた時代であり，現在は逆に「地域」との関わりが強い人々が一貫して増加期に入ると述べている．「地域」との関わりが強い人が増えていく時代のなかにあっては，ますます地域コミュニティ形成に関する課題の解決が希求されると考えられる．

（３）都市郊外部における地域コミュニティ形成に向けた方策

先に挙げたように地域コミュニティの必要性が言われていることから，地域コミュニティの形成が希求されている．国土交通省内で結成される都市型コミュニティのあり方と新たなまちづくり政策研究会（2011）では，地域コミュニティの形成のために，３つの視点を提示している．１点目が地域コミュニティにいて「地縁的」要素がある程度必要であること，２点目が，従来の地縁型自治組織の価値の再認識が必要であること，３点目がテーマ型の地域組織が従来型の地域組織と一定の共通目標に基づいた連携・融合を図りつつネットワークを拡大することである．

地域コミュニティの形成のための 3 つの視点について 1 点目，2 点目に関しては，行政からの働きかけにより積極的に解決策がとられている．例えば世田谷区（2014）は「地域の絆再生事業」として金銭の支援を行っている．また練馬区（2012）でも地域活動支援拠点の設置といったハードの整備や地域活動推進員の確保といった支援を行っている．しかし，地域組織の連携を図っていくための取り組みは，これまでなされてこなかった．地域組織の連携について，加山(2009)は，テーマ型の地域組織は新たな地域コミュニティ形成の契機として期待が高いものの，既存の地域組織との対立をもたらす可能性が指摘されていることからも,地域組織の連携を行っていくことの必要性を指摘している.よって今後，都市郊外部において地域コミュニティを醸成するための取り組みとして，地域組織間の連携を促すことが積極的に行われることが必要であるといえる．

そこで地域組織間の連携を促すためには，地域組織の中でも視点の 1 点目に挙げられているように地縁型組織に着目することが有効だと考えられる．地縁型組織とは，地縁に基づき結成される地域組織を指している．地縁型組織という概念は，NPO に代表される地縁に基づかず，ある共通の目的の達成を指向する住民で結成されるテーマ型組織の対概念として使われるようになった．地縁型組織の例として氏子，檀家，組，班などが挙げられる．地縁型組織のなかでもとりわけ存続期間の長い地縁型組織には，地縁に基づかないテーマ型組織と比べ，地域の課題に精通する有力者が所属しているとともに，既に長年の活動の継続を通じて培われてきた組織内外のつながりが存在する可能性が高いと考えられる．よって，存続期間の長い地縁型組織が，地域組織間の連携を促す可能性が考えられる．

（４）地縁型組織としての参詣講と地域コミュニティ形成の可能性

本研究では，長年，存続してきた地縁型組織として参詣講に着目する．都市郊外部は，一般的に弱体化していると言われている都市郊外部の地域コミュニティであるが，江戸時代に結成され，200 年以上にわたり存続している参詣講がみられる場所である．講とはある共通の目的に基づき結成される集会を指す（福田ら，2006）．参詣講とは，豊作や家内安全を祈願することを目的に地域内の氏神ではなく信仰対象とする地域外の山の寺社仏閣へ

集落内の住民によって結成された講中と呼ばれる組織で参拝を行う活動を指す(佐々木ら，1992)．

多くの長年続く地縁型の地域組織は社会的機能を果たすため原則全戸加入であることが多い.よってライフスタイルや価値観の多様な住民の増加は地域組織自体の弱体化を招く．しかし参詣講は任意参加でかつ娯楽の側面が強いため，異質な住民を受容せずに現在でも近代化以前の形を維持していることが考えられる．西海（2008）では参詣講は山岳信仰，修験道という宗教としての性質から位置づけがされている一方で,山中(2012)や伊藤(1989)では講について旅行や日常生活の息抜きの場として位置づけている．飲食や娯楽の機会を共有することにより，地域住民の交流が促進されるものと考えられる．よって参詣講を通じた地域コミュニティの形成が有効であると考えられる．

１−２　学術研究の動向

地域コミュニティに関してはこれまで社会学や民俗学，都市計画や農村計画，建築学の分野で多数研究が行われてきた．本節では，参詣講による地域コミュニティの形成に与える影響を研究するため,既往研究を（１）地域コミュニティに着目した研究,（２）民俗学，宗教学から講を扱った研究について整理し，本研究の位置づけを明確に示す．

具体的にはこれまでの研究を

（１）地域コミュニティに着目した研究

１）地縁型組織に着目した研究

２）新旧住民の観点から地域コミュニティの形成について論じた研究

（２）民俗学，宗教学の観点から講を扱った研究

に大別し，研究課題の提示を行う．

（１）　地域コミュニティに着目した研究

１）地縁型組織に着目した研究

地縁型組織を扱った研究として①班，②氏子，③講に着目した研究が挙げられる．

班に着目した研究として，伊藤（1998）では班構成や班の分離，独立の動態に着目したうえで新住民と農家である旧住民では交流の範囲が違うことを明らかにし，地域コミュニティを考慮した上で計画的な宅地開発を行うことを提言している．

氏子に着目した研究として，加納ら（2002）は都市化による氏子の空間構成の変化について河川との関係性から明らかにしている．池田ら（2005）は祭礼が旧農村としてのオリジナリティを担保しながら旧来の地域組織を新たな地域組織へと積み上げうることの可能性を示している．次に杉本ら（2003）は，古集落内部と周辺市街地の宅地変容を分析した上で，祭礼にたずさわる住民の構成の変質過程を明らかにしている．石川ら（2003）は，

地域自治の基礎をなす自治会の編成とその範囲と屋台の経費負担者，舁き夫の居住範囲を比較している．根岸ら（2007）は祭礼運営には綿密な打ち合わせが必要であることから町間で様々な交流が行われ結果として地域運営の担い手となりうる町外者や若者を町に巻き込み，祭礼を通じて育成する役割が祭礼にあると解明している．落合ら（2009）の研究においても，祭礼によって地域コミュニティが活性化していることを考察している．山崎（2010）は，祭礼を通じたテーマ型の地域組織の創出過程を明らかにしている．

また講に着目した研究として，伊藤（1989）では，集落内に存在する複数の地域組織の活動内容や参加者について網羅的に明らかにしており講についても言及している．加藤（2012）は港北ニュータウンを対象地として旧谷戸組が現在のコミュニティの単位となっていることを説明している．しかし，講について事例の１つとしてしか言及しておらず，講が地域コミュニティの形成に果たす役割について言及されていない．

以上のように旧来コミュニティに関しては様々な研究がなされている．しかし地域組織に関する研究はその多くが，氏子や組・班に着目されており講についての言及はみられても詳細な調査を行った研究はされていない．また，講が地域コミュニティの形成に果たす役割については論じられていない．

２）新旧住民の観点から地域コミュニティの形成について論じた研究

次に，新旧住民の観点から地域コミュニティ形成について論じた研究を述べていく．都市郊外部における地域コミュニティの課題については新住民，旧住民という観点から論じられており多くの研究が見られる．団地における住民同士の合意形成過程に着目した研究として村上ら（2007）や斎藤ら（2001）の研究が挙げられる．鎌田（1987，1988，1991）は一連の研究の中で，集落を新住民と旧住民の混住の形態に応じて分類を行い，それぞれで地域交流に対してどのくらいの頻度で参加しているのかを明らかにしている．しかし，長年続く地域組織に着目されておらず，自治会や町内会といった行政末端組織としての地域組織のみを注目している．

（２）民俗学，宗教学の観点から講を扱った研究

西海（2008）は御嶽講に着目し，関東一円に展開している御嶽講の歴史と武蔵御嶽神社での行事や御師[1]の布教活動について焦点をあて御嶽講が歴史的にどのように広がっていったのか解明している．三木（2001，2005）は三峯信仰が歴史的にどのような広がりを見せたのか江戸時代を対象に研究している．大谷（2004）は富士講を対象とし，修験者が布教し土着していく過程で発生した新宗教について富士講を手がかりとして存在を明らかにしている．しかし，御師でなく住民が結成する講についてその活動内容や地域コミュニティのなかでの役割について明らかにした研究はみられない．

[1] 本文 P13 を参照

（３）求められる研究課題

まず，参詣講に関しては民俗学や宗教学においても講中に着目した研究は少なく，多くが布教の過程や関東地方のスケールでどの地域が講を行っているかなど，参詣講を行う講中の実態について調べた研究はあまりない．また，都市計画や建築学，ランドスケープの学問分野からでは，参詣講に着目した研究がほとんどみられない．講を扱った研究も多くの地域組織のなかの１つとして講を記述することしかしておらず，必ずしも講の実態や役割について明らかにしているとはいえない．

参詣講が地域コミュニティの形成に果たす役割について考察した研究はされておらず，地域コミュニティの弱体化が問題となっている現在において研究する意義があると考えられる．

１−３　本研究の目的

背景で述べたように地域コミュニティの形成には，地域組織間の連携が重要となる．参詣講が地域組織間の連携に果たす役割を解明することが重要である．そこで本研究の目的は，都市郊外部における地域コミュニティの形成に果たす参詣講の役割を解明することである．具体的には，参詣講の１つである御嶽講（１−６参照）に着目し，以下３つの研究課題に取り組む．

まず第１に，御嶽講では誰がどのような行事を行っているのかを解明するため，御嶽講の活動主体および活動内容を把握する．第２に，参詣講参加者が他の地域組織とどのような関わりがあるのかを解明する．第３に，参詣講参加者が地域活動のなかで地域組織とどのような連携を行っていたかを解明する．以上を通して，御嶽講の活動主体が地域コミュニティにおいて果たしうる役割について解明する．

研究課題１：御嶽講では誰がどのような行事を行っているのか

研究課題２：参詣講参加者が他の地域組織とどのような関わりがあるのか

研究課題３：参詣講参加者が地域活動のなかで地域組織とどのような連携を行っていたか

１−４　研究の構成

本研究は，全部で５つの章から構成される．図 1-1 に本研究の構成を示す.

第１章では,研究の背景,既往研究における本研究の位置づけについて述べるとともに,本研究の目的と構成を示す.

第２章では，研究課題１の「御嶽講の活動の実態の解明」に取り組む．具体的には，東京都世田谷区の喜多見東部，大蔵本村，大蔵山野の３地域を対象に，御嶽講の活動内容，参加人数，活動時期を解明する．次に御嶽講員の属性を解明する.

第３章では，研究課題２の「参詣講参加者と他の地域組織との関わりの解明」に取り組む．具体的には，3 地域で参詣講参加者が他の地域組織とどのような関わりを持っているのかを解明する.

第４章では，研究課題３の「地域活動における地域組織との連携の解明」に取り組む．具体的には，祭礼における役割分担を把握することで御嶽講参加主体が，祭礼において果たす役割を解明する.

第５章では，第２章から第４章で得られた成果をまとめ，総合考察を行う.

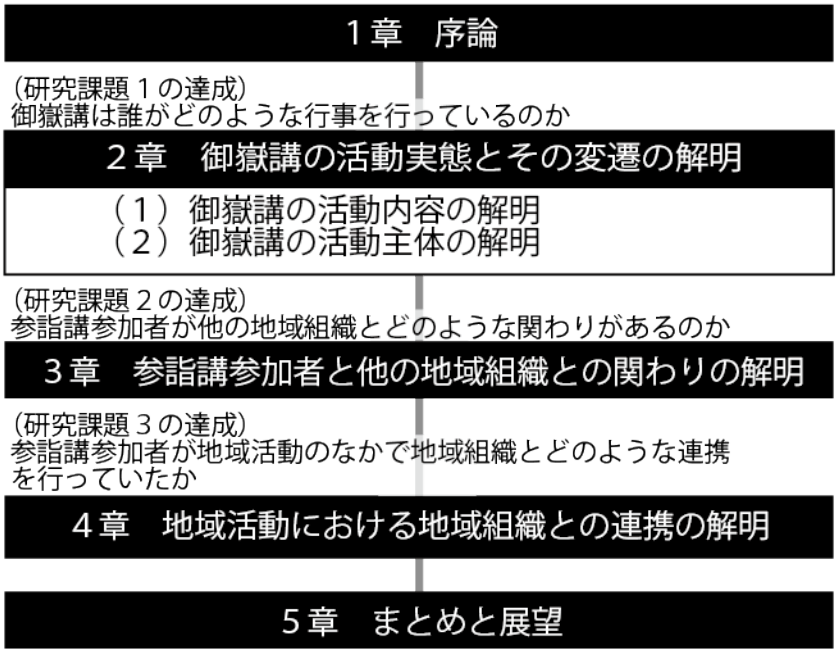

図 1-1. 本研究の構成図

１−５　用語の定義

（１）地域コミュニティ

まずコミュニティの定義について，様々な定義について述べる．R.M.マッキーバーは，コミュニティとアソシエーションを提唱しており，アソシエーションを「ある共同の関心または諸関心の追求のために明確に設立された社会生活の組織体」と定義した上で，コミュニティについて「アソシエーションをうみだす母体であり１つのコミュニティの中には複数のアソシエーションが存在する」と定義している（R.M.マッキーバー，2009）．初めて日本の公的機関によって示されたコミュニティの定義として，国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会（1969）では「生活の場において市民としての自主性と責任を自覚した個人及び家庭を構成主体として，地域性と各種の共通目標を持った，開放的で構成員相互に信頼感のある集団」としている．次に広井（2009）はコミュニティについて「人間がそれに対して何らかの帰属意識をもち，かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助の意識が働いているような集団」としている．次に山崎（2003）は，コミュニティの構成要素として①地域性（範域性）②共同性（相互作用）③社会的資源，生活環境施設の体系④共通の行動を生み出す意識体系を挙げており「一定の地域の共同生活で繰り広げられる生活世界における共同性や相互作用によって生み出される社会生活関係の体系と共同性に向かう価値意識」と定義している．

以上に挙げたコミュニティの定義から，共通している要素として相互扶助の精神，信頼関係（規範もしくは暗黙のルールの存在）が示される．そこで本研究では，地域組織について「構成メンバーが個々に相互扶助の精神を持っている集団」と定義する．さらに地域コミュニティに関しては，地域組織の集合体として定義する．

（２）参詣講

参詣講を定義する前に講については，福田ら（2006）によると，ある目的を達成するために結ぶ集団と定義されている．講はその性質から経済的講，社会的講，宗教的講の３つに大別できる（表 1-1）．経済的講は頼母子（たのもし）講や無尽講といった庶民の間での相互扶助の組織として位置づけられている．次に社会的講は，労働力交換のための結講や模合講，葬式のための無常講が挙げられる．宗教的講は地域社会内で完結する在地講と諸社寺へ参詣を行う参詣講に大別することができる．よって参詣講は，宗教的講であるが参詣講にはさらに，仏閣を中心に参詣する講と神社を中心に参詣を行う講に分けることができる．参詣講は飲食を伴い慰安・娯楽の機会となっている場合がある．そして参詣講に限らず地域社会の組織と一致している講の場合は，信仰に限らず，各種の相談ごとや取り決めをするなど社会的機能をもっているとされる．

表 1-1．講の結成目的と種類　福田ら（2006）より作成

<table>
<tr><th>講の機能</th><th colspan="3">目的</th><th>講の種類</th></tr>
<tr><td rowspan="2">経済的講</td><td colspan="3">金融</td><td>頼母子講、無尽講</td></tr>
<tr><td colspan="3">物資の融通</td><td></td></tr>
<tr><td>社会的講</td><td colspan="3">労力交換や共同労働</td><td>結講、模合講</td></tr>
<tr><td rowspan="5">宗教的講</td><td rowspan="5">宗教・信仰</td><td rowspan="3">在地講</td><td>在来の民俗信仰</td><td>水神講、日待講、庚申講</td></tr>
<tr><td>氏神を祀る神社の氏子集団による</td><td>氏神講、宮座講</td></tr>
<tr><td>仏教信仰</td><td>観音講、地蔵講、念仏講</td></tr>
<tr><td rowspan="2">参詣講</td><td>仏閣を中心</td><td>善光寺講、成田講</td></tr>
<tr><td>神社を中心</td><td>伊勢講、出雲講、御嶽講</td></tr>
</table>

１−６　研究の対象地

（１）参詣講としての御嶽講の概要

本研究では，参詣講の中でも御嶽講を対象とする．御嶽講をはじめとする参詣講には他に榛名講や三峯講，大山講，伊勢講，富士講が挙げられる（桜井 1976）．西海（2008）は，武州御嶽神社の御師が，とりわけ現在の都市郊外部[2]にあたる区域を中心に布教活動を展開したため現在でも御嶽講は都市郊外部において継続していると指摘している．ゆえに，御嶽講は，都市郊外部における参詣講の有用性を検証する上で，適切な事例であると考えられる．

御嶽講とは，豊作を祈願するために東京都青梅市の武蔵御嶽神社を信仰対象とする農業従事者の組織による活動である（図 1-2）．武蔵御嶽神社を信仰対象とする住民間で結成される講中と武蔵御嶽神社の神主である御師（おし）の両者の間で行われる．御嶽講には，講中の構成員(以下，講員とする)が代表者を決定し御師を訪ねる「代参」と講員全員で御師を訪ねる「総参り」が存在する．他にも代参から[1]帰ってきた講員を代参に参加していない講員が迎える「お日待ち（おひまち）」と，代参の担当を講員全員が経験した後に講員全員で参詣し神楽を奉納する「太々神楽（だいだいかぐら）」と御師が講員の自宅をまわり太占祭（ふとまにさい）御札，眷属（けんぞく）の護符（ごふ）を含めた４種類の護符を配る「配札（はいさつ）」を活動に含む（図２）．

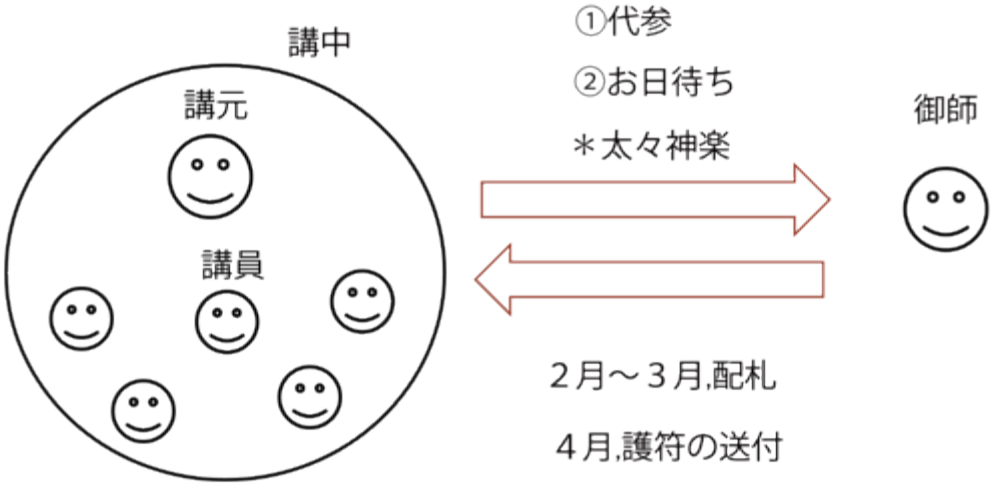

図 1-2. 御嶽講で行う活動[3]

[2]現埼玉県入間郡・比企郡，東京都の三多摩（旧北多摩郡，南多摩郡，西多摩郡）といわれる地区，神奈川県川崎市，相模原市

[3] 西海（2008）をもとに作成した．図中の講中とは，御嶽講を行う集団を指している．講中のリーダーを講元と呼ぶ．講員とは御嶽講を行う集団の一員を指す用語として使用する．

（２）研究対象地

参詣講は氏子のような地域組織が行う場合もあれば，組などの自治組織が行う場合もある．そこで，参詣講の役割を考察するためにも複数の事例を選定し比較する中で，祭礼コミュニティにおける参詣講の位置づけを把握していくべきである．そこで本研究は，近世以前から続く御嶽講の有用性に着目するため対象地を複数カ所選定し比較を行っていく．

基本的に講は，近世以前の集落の構成単位である小字に依拠して結成される．そこで西海（2008）と世田谷区郷土資料館（1992）より御嶽講が現在も継続されている場所であり，かつ講が組織される範域に占める農地の割合を考慮し，対象地の選定を行った．具体的には，都市郊外部[4]に位置する東京都世田谷区の喜多見東部（現喜多見町 1～5 丁目），大蔵本村（現大蔵町 6 丁目），大蔵山野（現砧町 1～8 丁目）を対象地とする[5]（図 1-3）．対象地の選定理由として，講に関する資料が豊富に存在していることが挙げられる．まず世田谷区郷土資料館（1992）は御嶽講の平成 4 年における御嶽講の実態を調査している．また町目ごとに郷土資料が編纂されており，御嶽講に参詣講に関する記述がみられた（世田谷区，1983，1987，1998，1999）．

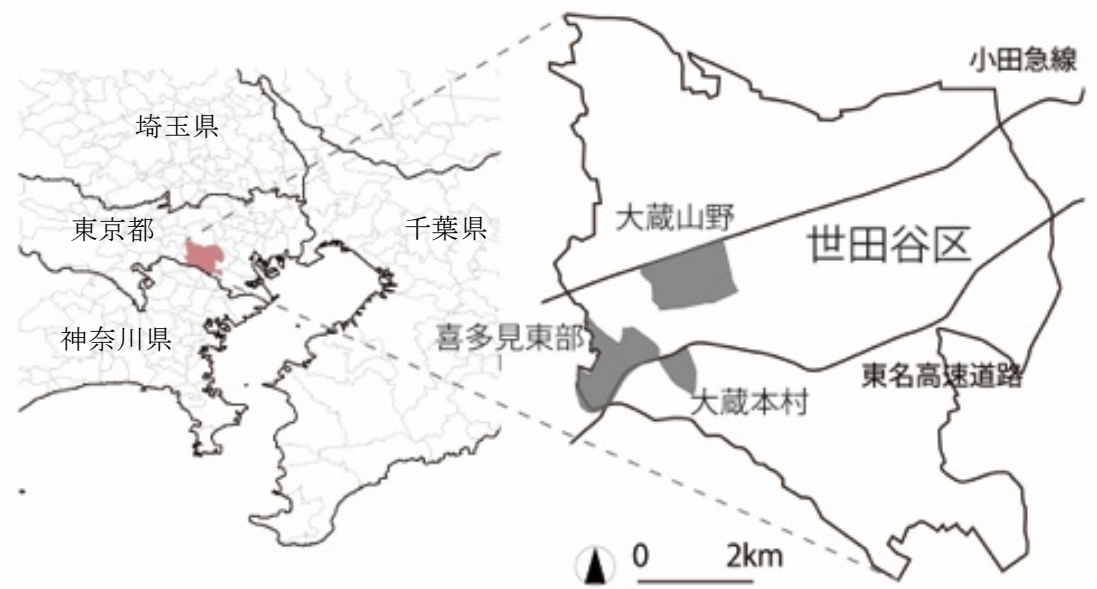

図 1-3. 対象地位置図

[4]本研究では都市近郊部について 50km 圏内を都市郊外部として扱っていく．

[5]大蔵本村，大蔵山野はいずれも小字の名前である．講中の団体名は小字の名前を冠していることから，本研究では小字の名前である大蔵本村，大蔵山野を使用していく．なお喜多見東部については，小字の名前とは分離して基本的な地域コミュニティが形成されている．この理由については明らかになってはいないが講中も小字でなく喜多見東部という範域で構成され名前も同様であることから以下では喜多見東部とする．

以下では，３地域における社会状況について概説する．

大蔵山野と大蔵本村は同じ大蔵村になり，1890 年に大蔵村と喜多見東部を含む喜多見村など合計５ヵ村が合併して砧村となっている．大蔵山野は人家が少なく山の方という意味合いから山野という地名が付いている．1927 年の小田急線開通により本格的に開けた場所であり，それまでは，中心を流れる谷戸川を中心とする水田以外には山林が優占していた．大蔵本村は，集落としての歴史が古く水田が土地利用の多くを占めていた．縄文後期より人が住み始めていたことが確認されている．喜多見東部は，大正 10 年頃まで桑畑が多く存在していた．図 1-4 は 3 地域における人口推移を示した図である．昭和 50 年以前は，町丁目ごとに人口の統計を集計していないため，昭和 50 年以降の人口推移を示す．大蔵山野は 1927 年の小田急線開通に伴い住宅地の開発が進んだことにより３地域のなかでもとりわけ人口の増加が激しく，平成 22 年時点で人口は 2 万人を超えている．次いで喜多見東部が 8845 人，大蔵本村が 911 人となっている．

3 地域における農地の残存状況について述べる．喜多見東部は，世田谷区が指定する農地重点保全地区である．次に大蔵本村は世田谷区が指定する農地保全地区に指定されている（世田谷区，2010）．対象地 3 地域における御嶽講の御師は共通の御師である．3 地域とも御嶽講以外にも講が確認されている[6]．世田谷区（2010）では，自治会や町内会の加入率が年々，減少傾向にあることが示されている．よって地域コミュニティが弱体化している場所としても適切であるといえる．

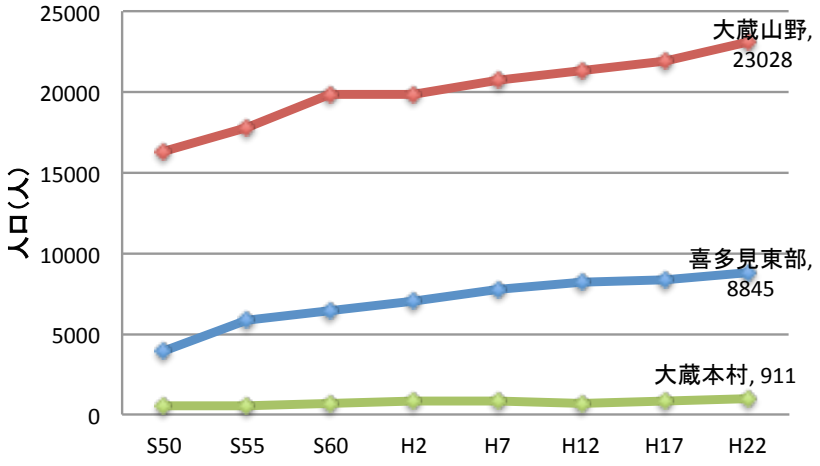

図 1-4. ３地域における人口推移

[6]喜多見東部では，御嶽講以外に，成田山新勝寺への参詣を行う不動講，喜多見東部内にある慶元寺の檀家で一年に一度念仏を唱える双盤念仏講，喜多見東部内に存在する須賀神社で世田谷区の無形文化財に指定されている湯花神事を行う天王様の講が継続して行われている．大蔵本村では，御嶽講のみ継続している．大蔵山野では，御嶽講以外に埼玉県秩父市にある三峯山にある三峯神社への参拝を行う三峯講，群馬県高崎市にある榛名山にある榛名神社へ参詣を行う榛名講，檀家が集まり念仏を唱える念仏講が継続している．

第２章　御嶽講の活動実態とその変遷の解明

２−１　本章の目的

本章では，基礎情報として，御嶽講の活動実態を解明する．具体的には，2012 年における 3 地域における御嶽講の活動内容と参加者の属性の解明を行う．

２−２　研究の方法

以下では，活動内容と参加者の属性に分けて調査方法を記述する（図 2-1 参照）．

１）御嶽講の活動内容

まず現在の講員に対して聞き取り調査を行うために，居住地を特定した．具体的には，世田谷区立郷土資料館が編集している『社寺参詣と代参講』をもとに，平成４年時点での講員の所在地[7]をもとに，御師に対して 2012 年に配札活動を行った家を示してもらった（図 2-3）．次に，把握した講員の所在地をもとに３地域の講員に対して，活動内容について聞き取り調査を行った．活動内容として聞き取った項目は，2012 年における御嶽講の日付，参拝で行う活動の手順，参拝形式[8]（代参，総参り），人数，御嶽講を行う地域組織についての質問項目（地域組織の名前，御嶽講以外に行う活動の詳細）である．

御嶽講を行う地域組織について質問した経緯として，御嶽講を行う地域組織が地域ごとで異なっていることによる．３地域の講元に対して１人１時間から２時間，一回ずつ聞き取り調査を行った．

２）御嶽講員の属性

御嶽講員の属性を解明するために，３地域の講元，講員合わせて６人に対して聞き取り調査を行った．質問項目は年齢，職業である．

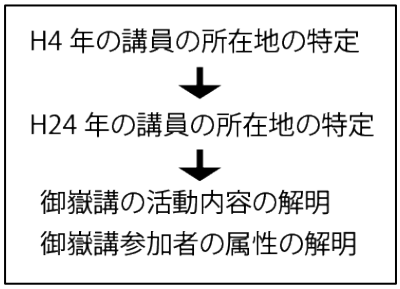

図 2-1. 調査のフロー

[7]大蔵山野では平成４年時点で 20 名が配札活動によって護符が配布されていた．一方，大蔵本村は 25 名，喜多見東部は 29 名の講員がそれぞれ確認された．

[8]御嶽講の参拝形式には，講員から代表者を選出して参詣する代参もしくは，講員全員で参拝を行う総参りの２つの形式がある（佐々木ら，2005）．

表 2-1. 聞き取り調査対象者と調査事項

調査日	ヒアリング対象者	調査事項
2013 年 2 月 9 日	武蔵御嶽神社の御師	・大蔵本村，大蔵山野講中講員の現在の所在地 ・代参と配札の有無
2013 年 2 月 11 日 2013 年 6 月 15 日	三峰神社氏子 (大蔵山野講中)	・活動内容，活動頻度，代参の時期，参加人数，講を行う母体となるコミュニティに関しての情報
2013 年 6 月 19 日	喜多見講中講員	
2013 年 6 月 26 日	本村講中講元	

図 2-2. 聞き取り調査の様子　2013 年 8 月 19 日（大蔵山野講中の所属者２名）

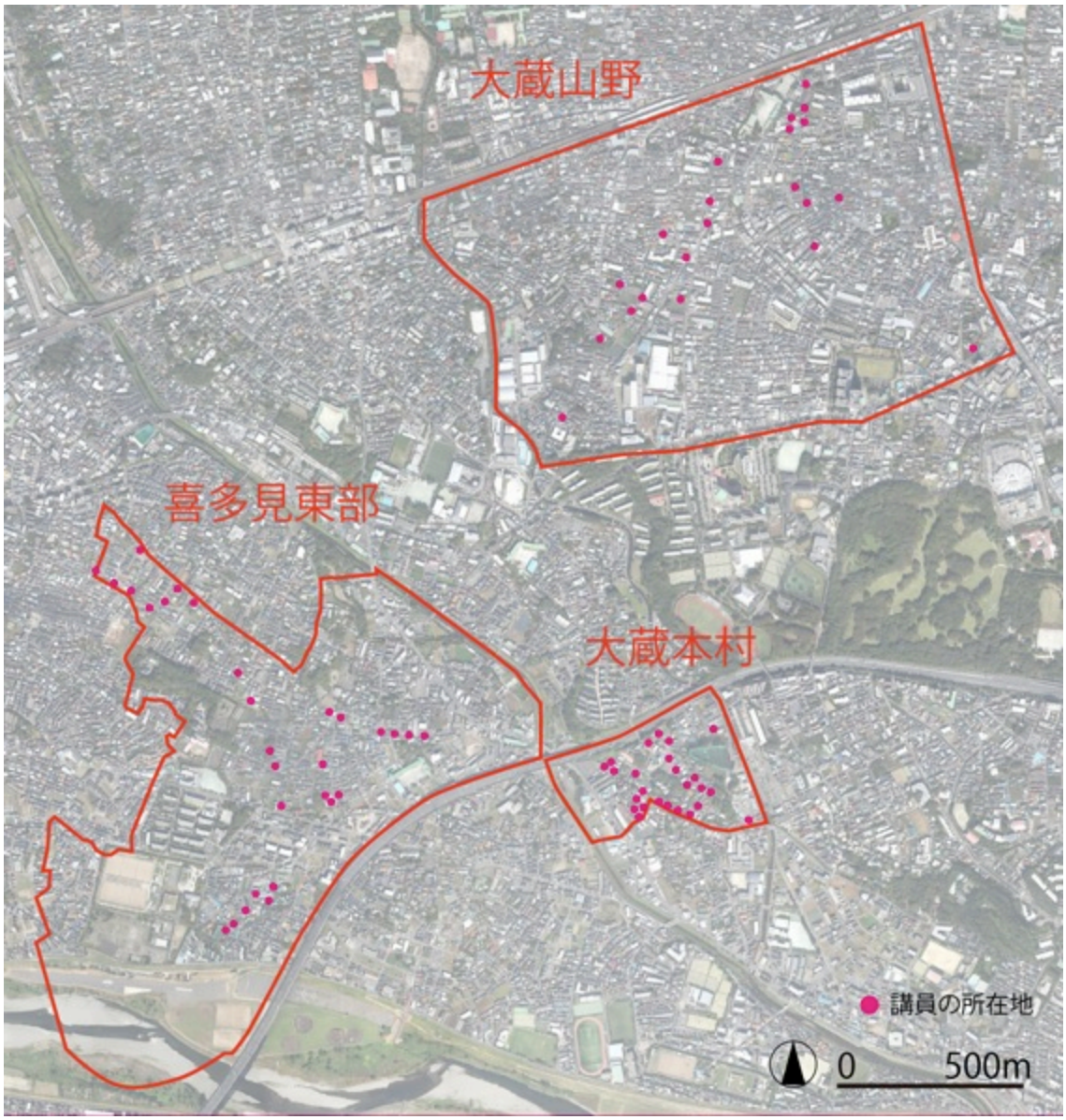

図 **2-3.** 平成４年における３地域の御嶽講員所在地

世田谷区郷土資料館（**1992**）をもとに作成

２−３　結果と考察

（１）御嶽講の活動内容の解明

１）喜多見東部

喜多見東部では，御嶽講は農協の地域ごとに結成される支部である喜多見東部支部の活動として位置づけられていた．農協の喜多見東部支部にて一年に一回行われる総会にて参加者を募っていた．地域支部は，営農や品評会について協議する．喜多見東部支部員は 35 人おり，うち 2012 年の御嶽講への参加人数は 13 人であった．参拝形式は代参ではなく総参りで御師の経営する宿に宿泊していた. 活動時期は 8 月 8 日から 9 日にかけて行われた.

総参りで行われる活動は，まず御師が経営する宿に行く．次に武蔵御嶽神社への参拝を行い, お祓いを受ける. お祓いの後に宿に戻り食事を摂り一泊したのちに帰宅する（表 2-2）.

２）大蔵本村

大蔵本村では，現在も講中で御嶽講を行っている．講中の活動は御嶽講以外に現在は存在しない．講中ではかつては，大山講を行っていたが現在は行われていないことが講員に対する聞き取り調査より明らかになっている．講員は 9 人おり，うち参拝人数は 5 人であった．参拝形式は代参でなく総参りであり日帰りで行っていた．講員 9 人のうち参拝を行っていない 4 人に関しては，高齢で参拝を行うことができないため参拝は不参加で，総参りを終えた講員から護符を受けとっている．活動時期は 10 月 17 日に行われた.

総参りで行われる活動は，まず御師が経営する宿に行く．次に武蔵御嶽神社への参拝を行い，お祓いを受ける．お祓いの後に宿に戻り食事を摂り帰宅する.

３）大蔵山野

大蔵山野では，三峯神社の神社運営の関係者による活動として位置づけられていた．氏子の活動としては，毎月 1 回の神社の清掃活動，例大祭や七五三の運営，神社の設備の改修などが挙げられる. 参拝人数は 16 人であった. 参拝形式は代参でなく総参りを行っており日帰りであった．活動時期は 4 月 8 日に行われた.

総参りで行われる活動は，まず御師が経営する宿に行く．次に武蔵御嶽神社への参拝を行い，お祓いを受ける．お祓いの後に宿に戻り食事を摂り帰宅する.

表 2-2. 御嶽講の活動内容

講中の名前	講を行う組織	活動時期	活動の詳細		参拝形式	人数
喜多見東部	農協	8 月 8,9 日	泊まり	宿→神社へ参拝→お祓い→宿→食事→宿泊→札の授与→帰宅	団参	13 人
大蔵本村	部落	10 月 17 日	日帰り	宿→神社へ参拝→お祓い→宿→食事→札の授与→帰宅	団参	5 人
大蔵山野	氏子	4 月 8 日	日帰り	宿→神社へ参拝→お祓い→宿→食事→札の授与→帰宅	団参	16 人

（２）御嶽講の活動主体の解明

１）年齢

次に３地域における聞き取り調査をもとに 2012 年の御嶽講員の年齢について把握した．参加者の年齢を図 2-4 に示す．年齢別にみると，喜多見東部では 50 代(23%)，60 代(54%)，70 代(15%)，80 代(5%)となり 50 代以上の参加者で構成されていた．次に大蔵本村では，50 代（40%），60 代（40%），70 代（20%）となり，50 代以上の参加者が過半数を占めた．一方，大蔵山野では，30 代（6%），50 代（6%），60 代（31%），70 代（31%），80 代（25%）となり，60 代以上によって 87%構成されていた．結果，いずれの地域において 50 代～60 代以上の参加者が大半を占めていることが把握された．

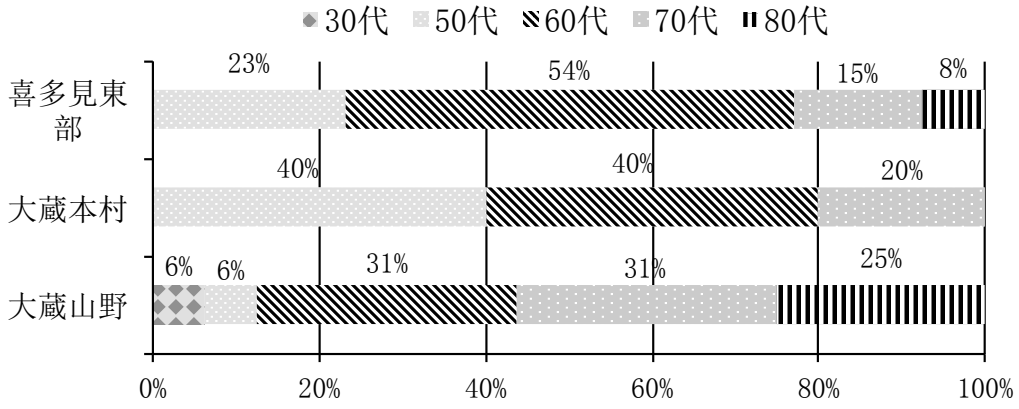

図 2-4. 参加者の年齢構成

２）職業

次に講員が現在どのような職業に従事しているのか職業別にまとめた(図 2-5). 職業の分類として参詣講が元々農業従事者による活動であることから専業農家，そして対象とする範域内で働いている自営業，そしてその他の公務員と分類を行った.

喜多見東部は自営業が 8%，専業農家が 54%，無職が 38%となり専業農家が参加者の過半数を占めている．喜多見東部では，農協の地域支部で御嶽講を行うことからも，農家による取り組みとして御嶽講が継続していることが読み取れる.

大蔵本村では，専業農家が 80%，無職が 20%となった．喜多見東部と同様に専業農家が過半数を占めている. また講参加者への聞き取り調査の結果から大蔵本村では講員が年々，高齢により減少していることが分かった．また参詣講参加を辞めるきっかけとして農業をやめることが要因となっていることも聞かれた．よって大蔵本村においても喜多見東部と同様に農家による取り組みとしての性格が強いことがうかがえる.

一方, 大蔵山野では公務員が 6%, 自営業(その他)が 19%, 専業農家が 13%, 無職が 50%, 不明が 13%となった．専業農家は 13%に留まり，19%は自営業に 6%が公務員に従事しており農家の割合が喜多見東部や大蔵本村に比べて少ないことが把握された.

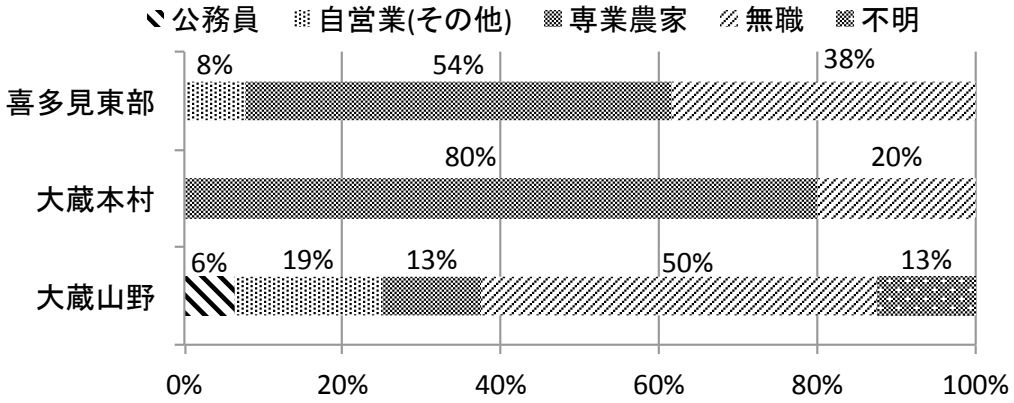

図 2-5．参加者の職業構成

２−４　小括

御嶽講の活動内容に関しては，3地域ともに代参から総参りに変更しており，講員が減少していること，高齢化していることに伴い活動内容が変化していることが把握された．

次に講参加者の属性について記述していく．講参加者の年齢層をヒアリング調査した結果，講員が3地域ともに高齢であることが明らかになった．

職業に関する項目では，喜多見東部や大蔵本村では講員は農業従事者が多く，大蔵山野は農業従事者が少ないことが明らかになった．聞き取り調査のなかで，講の参加理由として喜多見東部や大蔵本村では，「農業豊作のための行事であるから」「昔から農家による取り組みであったから」といった理由が聞かれた．ここから農業のための行事という意味合いが残っていることが考えられる．しかし，大蔵山野において同様に講の参加理由について訪ねたところ，参加理由として「旅行のようなもの」と聞かれた．よって，大蔵山野では御嶽講の目的である豊作の祈願は形骸化していることが考えられる．以上の属性の調査の結果から，大蔵山野における御嶽講員が喜多見東部，大蔵本村と比べて，農業従事者が少ないという側面から本来の御嶽講の意味合いが変化していることが考えられる．

以下では，３地域における御嶽講に関して何故，活動内容や参加者の属性に違いがみられるのか考察する．３地域の御嶽講の地域における位置づけや意味合いが変化した理由としては，対象地における都市化の変遷の違いが要因として考えられる．杉本ら（2003）は，古集落における近代化以前から続く地域組織が大都市の市街化の展開と密接に関わりながら変容していることを考察している．この指摘を踏まえると，都市化の違いによって地域組織の活動内容や参加者の違いがもたらされると考えられる．

世田谷区（1999）によると大蔵山野は，明治時代に田として開墾された場所であり，『大正十年頃の砧は，畑の他は雑木林に囲まれた農村で・・・』とあることからも，小村であったことがうかがえる．1927年に小田急線が開通して以降も，人口が増えなかったことが書かれている．一般的な，都市郊外部では，1960年代から始まる高度経済成長期より人口が急激に増大することにより混住地域が形成される．奥田（1983）は混住地域の問題の所在として，農家と非農家をとりむすぶ共有的基盤を挙げている．しかし，大蔵山野では1960年代以前から都市化が徐々に進行していたため，農家と非農家の対立構造が発生せず，農業従事者と非農業従事者が御嶽講を行う素地が形成されていたことが考えられる．

第３章　参詣講参加者と他の地域組織との関わりの解明

３−１　本章の目的

参詣講参加者と他の地域組織との関わりの解明を行う．参詣講参加者がどの地域組織に所属しているのか，そして地域組織のなかでの役職を 3 地域において解明する．

３−２　研究方法

3 地域における参詣講参加者に対する聞き取り調査を行った．聞き取り調査を行った項目として，所属する地域組織と地域組織内での役職を設定した（表 3-1）．

表 3-1．聞き取り調査概要

対象地	聞き取り対象者	質問事項
大蔵山野	講元*、講員計 3 名	所属する地域組織 地域組織での役職
大蔵本村	講元*、講員計 2 名	
喜多見東部	講員 1 名	

＊講元とは講を行う組織のリーダーを指す

３−３　結果と考察

講員の所属する地域組織について明らかにした（図 2-6）．喜多見東部では，囃子会に参加する講員が 28%（人），寺総代が 8.3%（人），消防団所属が 33%（人）確認された．また複数コミュニティに所属している参加者もみられた．具体的には，囃子会と寺総代を担っている講員は 8.3%，囃子会と消防団に所属する講員は 16.7%，囃子会と消防団と町会役員を担っている講員は 8.3%であった．

大蔵本村では，自治会，氏子への所属が把握された．自治会所属者は 5 人中 4 人，氏子は 5 人中 3 人把握された．5 人中 3 人が氏子と自治会を兼務していることが分かった．過半数は講員と氏子役員の両者に所属していることになる．

大蔵山野では，氏子，講中，囃子会，自治会に参詣講参加者が所属していた．様々な地域組織に所属していることが把握された．

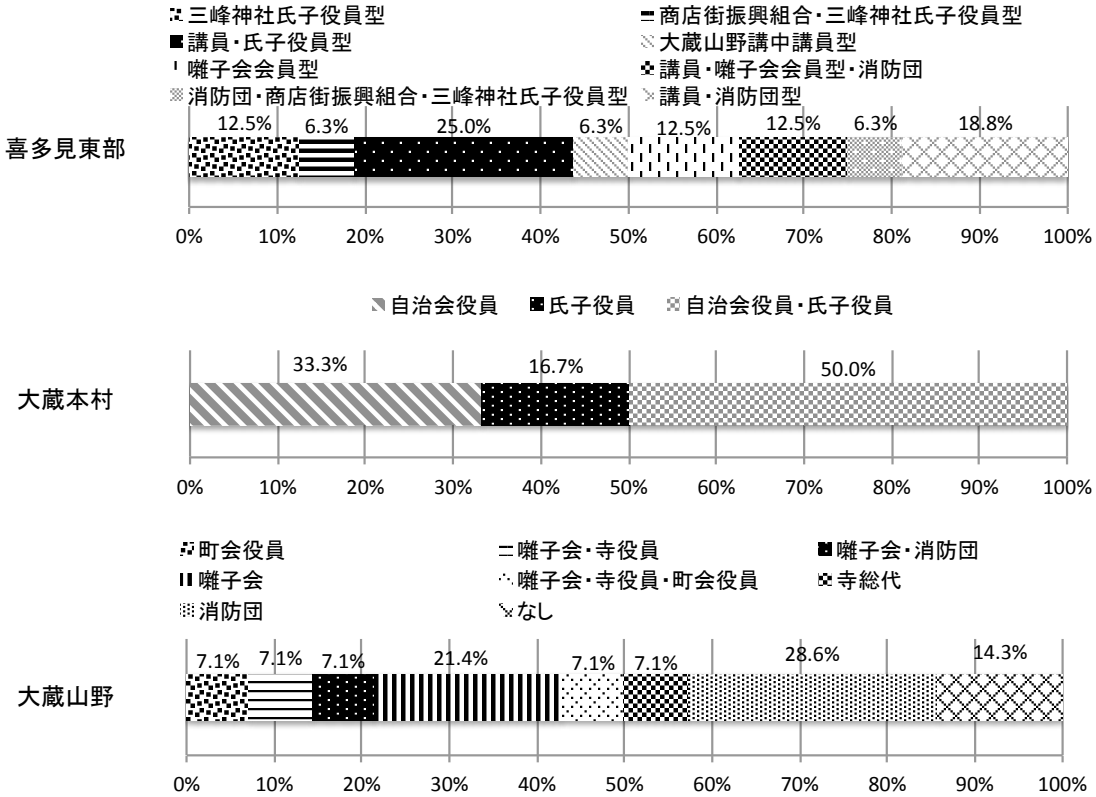

図 3-1.　3 地域における御嶽講参加者が所属する地域組織

次に，所属する地域組織内での役職を解明した（図 3-2）．大蔵山野では，氏子では 7 人が氏子役員であり，なかには氏子の 3 役である氏子総代，氏子副総代，氏子会計が含まれている．次に，囃子会では役員は見られず会員であった．町会では，16 人中 15 人が所属しておりうち 1 人が町会役員であった．消防団では，かつて副団長を務めていた講参加者がみられた．農協支部では，農協理事を務めていた講参加者がみられた．商店街振興組合では副会長になっている講参加者がおり，自治会では自治会長の代わりに別の自治会役員が参加していた．大蔵本村では，氏子の役員である世話人に所属している講参加者が 4 人おり町会では，5 人全員が役員となっていた．元町会長と会計と防火部部長と青少年部長が確認された．農協支部では，1 人が農協支部長であった．最後に喜多見東部では，2 人が檀家の総代と筆頭総代になっている．町会では，１人が副町会長になっている．そして農協支部では，1 人が農協副組合長となっている．

	参加者	近代以前の地域組織			戦前の地域組織			戦後の地域組織	
		氏子	檀家	囃子会	町会	消防団	農協支部	商店街振興組合	自治会
大蔵山野	A氏	●			△				
	B氏	●			△				
	C氏	●			△	●			
	D氏	●			△	△		●	
	E氏	●				△			●
	F氏	●			△				
	G氏	●			△	△	●		
	H氏				△				
	I氏				△	△			
	J氏				△				
	K氏				●	△			
	L氏	●		△	△	△			
	M氏				△				
	N氏			△	△				
	O氏			△	△	△			
	P氏			△	△				
大蔵本村	A氏	●			●		?		
	B氏	●			●		△		
	C氏	●			●		△		
	D氏	●			●		△		
	E氏				●		●		
喜多見東部	A氏				△		△		
	B氏	△	●	△	△	△	△		
	C氏		●		△	△	△		
	D氏				△	△	△		
	E氏	△			△	△	△		
	F氏				△		△		
	G氏				△	△	△		
	H氏			△	●	△	△		
	I氏	△			△		△		
	J氏	△		△	△	△	△		
	K氏				△	△	△		
	L氏	△		△	△	△	●		
	M氏			△	△	△	●		

● 役員

△ 会員

現在参加

過去に参加

過去も不参加

図 3-2. 御嶽講参加者の所属する地域組織と役職

３−４　小括

所属する地域組織を解明した結果，大蔵山野では様々な地域組織への所属状況が明らかとなった．また，大蔵本村では御嶽講参加者は数少ない地域組織に所属していることが明らかとなった．喜多見東部でも大蔵山野と同様に多様な地域組織へ所属していることが明らかになったが，戦後から継続する地域組織への所属は見られなかった．よって，大蔵山野では，とりわけ多くの地域組織への参加がみられた．

以下では，なぜ大蔵山野では多くの地域組織への参加がみられたのか考察するため過去の活動内容の変遷を追っていく．御嶽講の活動内容の変遷を調査した結果，大蔵山野における御嶽講は，2001 年より 2006 年まで休止していたことが明らかとなった（図 3-3）．2000 年までは参拝形式は，代参であった．しかし 2007 年以降，参拝形式は総参りとなっていた．総参りとなった原因について，人数が少なくなったことが聞きとり調査より聞かれた．選出された代表者が参拝に行く代参は，本来全員で行くことができなかったことから代表者に積み立てた旅費を預け参拝へ行ってもらう行為である．

次に活動主体について述べる．2000 年までは，講中のみで参拝を行っていたが，2001 年から 2006 年までの休止を経て再開した際には，講中以外の氏子や囃子会といった地域組織からも参加者がみられるようになった．2001 年〜2006 年にかけて参詣講が休止していた原因として講参加者であり大蔵山野の氏神である三峯神社の総代に対して聞き取り調査を行った結果，2000 年まで参詣講を行っていた講員が高齢化したことにより参詣を行う体力がなくなったことが原因として挙げていた．2007 年より参詣講が再開されたことに関しては，「若い人に参詣講を伝えたかった」「旅行のようなもの」といった意見が聞かれた．

以上の理由から，大蔵山野では講員による呼びかけにより積極的に様々な地域組織との関わりを持とうとしていたことが考えられる．

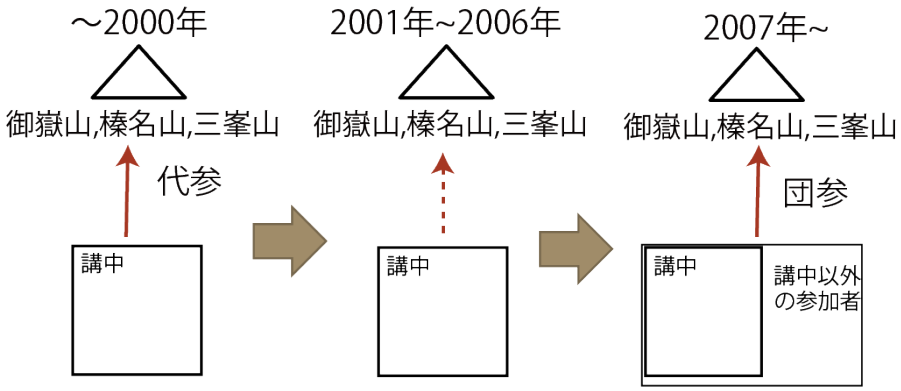

図 3-3　御嶽講の活動内容の変化

第４章　参詣講参加者の地域活動における地域組織との連携の解明

４−１　本章の目的

第３章では御嶽講員が，講中以外に広がっていることが明らかとなった．本章ではそれら御嶽講参加者の所属する地域組織の活動内容を解明し，例大祭の中でどのような役割を果たしていたか解明する．

４−２　研究の方法

講中のリーダーである講元や自治会役員，囃子会会員，商店街振興会組員に対して各コミュニティの活動内容や所属人数についてヒアリング調査を行った（表 4-1）．また御嶽講に関わっていた各地域組織がどのような役割を担っているか把握するため, 2012 年 9 月 15 日に始まる祭礼委員会から祭礼当日まで参加し参与観察を行った．

表 4-1．調査対象者と質問事項

<table>
<tr><th colspan="2">所属コミュニティ</th><th>日付</th><th>質問事項</th></tr>
<tr><td colspan="2">講中所属者</td><td>2013 年 8 月 19 日</td><td rowspan="4">所属人数，年間の活動について</td></tr>
<tr><td colspan="2">囃子会会員</td><td>2013 年 12 月 5 日</td></tr>
<tr><td rowspan="2">氏子役員</td><td>自治会役員</td><td>2013 年 12 月 6 日</td></tr>
<tr><td>商店街振興組合員</td><td>2013 年 8 月 19 日</td></tr>
</table>

４−３　結果と考察

講中の活動内容について以下に述べる．講中に所属している講員は 2008 年時点で 36 人であった．毎年 3000 円の講金を支払っている．毎年集められる講金から参詣講にかかる費用の一部を講金より補填している．講員はこのように講金への出資を通じて参詣講参加の費用を負担しているが, 講中所属者以外は御嶽講にかかる直接の会費のみを支払っている．講金は，講員のなかで不幸があったときに，講金から香典が拠出されている．講中の活動内容として，御嶽講以外にも神社の運営に関する活動が挙げられる．

次に氏子について述べる．氏子とは大蔵山野の氏神である三峯神社の行事運営を行う組織であり講中から８人（西山野，東山野から４人ずつ），２商店街より３人ずつ，砧町自治会より１人代表者が選出されて計 12 人で構成される．御嶽講に参加していた氏子役員は，商店街，自治会から選出された代表であった．氏子総代や氏子副総代，氏子会計は講中からの代表者のなかから選出されている．

最後に囃子会の活動について述べる．囃子会の会員は 2012 年時点で 19 名である．主に小学生が 13 人おり，加えて小学生を教える指導役として 6 人の会員がいる．活動内容としては，例大祭前の毎週火曜日に練習を行っている．三峯神社の例大祭にて演奏を担当している．

御嶽講に参加する各地域組織の活動内容から，御嶽講に参加する各地域組織は，大蔵山野の氏神である三峯神社の行事運営に携わっている地域組織であることが分かった（図 4-1）．図 4-1 から神社の行事運営に関わる地域組織が，全て参加する行事として御嶽講と大祭が挙げられる．大祭とは，神社にて一年に一度行われる例大祭を指している．

活動	日付	講中	氏子	囃子会
世話人会	毎月1日		○	
正月	1月1日 0時～2時		○	○
元旦祭	1月1日 8時	○		
元旦祭	1月4日		○	
世話人会	毎月1日		○	
お焚き上げ	1月14日		○	
初集会	1月15日	○	○	
百万遍	2月1日	○		
初午	2月17日		○	
御嶽講	4月8日	○	○	○
御日待ち	4月15日	○	○	
灯籠立て	7月25日	○		
風祭	9月1日	○		
大祭	10月6日	○	○	○
七五三	11月10日		○	
清掃	12月23日	○		
清掃	12月29日		○	

図 4-1．神社コミュニティの年間の行事

以下では，神社の行事の一例として大祭を取り上げ，例大祭において各地域組織がどのような役割を果たしたのか解明する．大祭は最初に 9 月 15 日に行われる祭礼委員会から始まる．祭礼委員会では，大祭の前日の準備から後日の片付けまでの，段取りを確認する場であり，役割分担を確認する場でもある．前日準備は，10 月 5 日の午前 9 時より始まり会場設営を行う．例大祭は 10 月 7 日に行われ，午前 10 時より大祭の式典が執り行われ，12 時に神輿巡行から開始する．18 時には神輿巡行が終わり，三峯神社へ神輿が帰ってくる．神輿が帰ってきた後に奉納演芸という演芸大会が行われる．例大祭の翌日である 10 月 8 日に祭礼の後片付けを行う鉢洗いがある．以上が大祭の一連の行程である（図 4-2）．

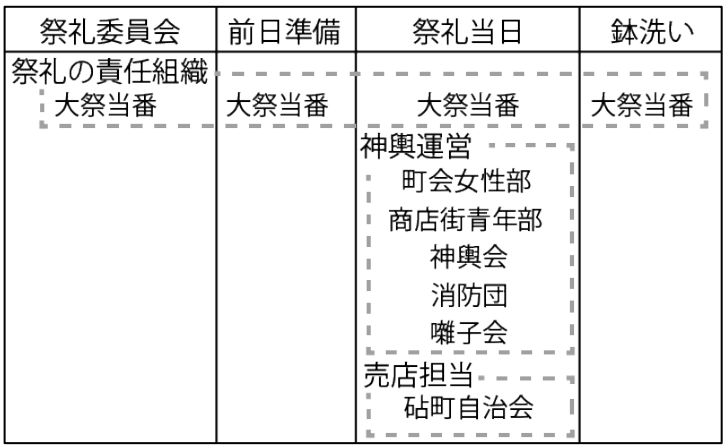

図 4-2．祭礼の行程と各コミュニティとの関わり

祭礼の分担として，祭礼の運営組織，神輿運営，売店担当が挙げられる．祭礼の運営組織は，大祭当番が担当する．大祭当番は講中のなかから毎年１０名選ばれている．次に神輿運営は商店街青年部が子ども神輿の巡行を担当し，神輿会が，成人が担ぎ手となる神輿の巡行を担当する．消防団は神輿の警備を行い，囃子会は神輿の巡行に合わせて演奏を行っていた．祭礼運営は，御嶽講に関わる地域組織によって担われていることが明らかとなった（図 4-3）．祭礼の運営において講中が総責任を負っており役割分担や祭礼の段取りを決定していることからも，祭礼において講中が他の地域組織を束ねる役割を担っていたことが考察できる．

講中が祭礼の運営を行う理由としては，氏子の重職が講中の所属者によって担われていることに起因する．氏子 3 役である氏子総代，氏子副総代，氏子会計は必ず講中より選出されることが聞き取り調査より明らかとなっている．講中が神社の行事運営において重要な役割を占めていたことがうかがえる．

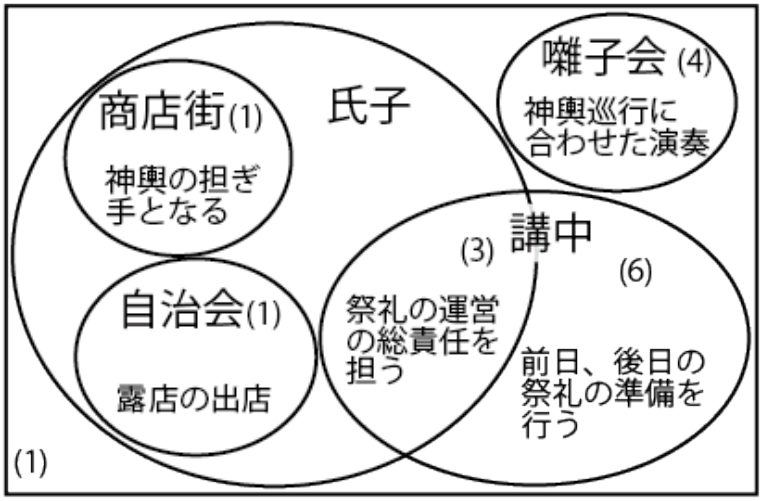

図 4-3．祭礼運営の組織図

図 4-4．神輿巡行の様子
2013 年 10 月 6 日　筆者撮影

図 4-5．神輿巡行に合わせた囃子会による演奏

４−４　小括

各地域組織の活動内容を解明した結果，御嶽講に参加するそれぞれの地域組織は，大蔵山野の氏神である三峯神社の行事運営に携わっており，三峯神社の行事運営を共通点としていることが分かった．また大祭での参与観察の結果，大祭を運営する上で，参詣講参加者が所属する地域組織の役割は重要であることが明らかとなった．なかでも講中は，祭礼の運営の総責任を担っており，各地域組織の調整役としてまとめる役割を担っていることが考えられた．氏子 3 役である氏子総代，氏子副総代，氏子会計は必ず講中より選出されることが聞き取り調査より明らかとなっている．よって講中が神社の行事運営において重要な役割を占めていたことがうかがえる．

次に図 4-1 の神社の年間行事を通して，氏子や講中や囃子会が同じ機会に同席する例は例大祭をのぞき御嶽講しか存在しないことが分かった．つまり御嶽講は，神社の行事運営に関わるすべての地域組織が参加する数少ない機会となっていることが考察できる．よって神社の行事運営のために御嶽講のような機会が重要であったことも考えられる．

澁谷（2001）や塚（2010）によると祭礼には住民同士の関わりを創出する機能があることが指摘されている．また根岸ら（2007）は，祭礼を行うことにより地域外住民を地域自治に関わらせる可能性があること，そして祭事運営に伴い綿密な打ち合わせが必要となることから隣町の間で様々な交流が発生していることを示唆している．また落合ら（2009）は祭礼という非日常での協力が災害といった有事の際の対応や組織運営に寄与することを示している．以上のように，祭礼は新たな地域コミュニティの形成に寄与する可能性がある．

第５章　総合考察

研究の結果以下の事項が明らかとなった．以下では各章のまとめを行った上で，今後の地域コミュニティの形成における提言を行う．

５−１　総括

本研究では，研究課題として３つ挙げた．３つの研究課題を以下に述べ，それぞれの課題に対応する章ごとに研究の結果を総括する．

研究課題１：御嶽講では誰がどのような行事を行っているのか
研究課題２：参詣講参加者が他の地域組織とどのような関わりがあるのか
研究課題３：参詣講参加者が地域活動のなかで地域組織とどのような連携を行っていたか

研究課題１：御嶽講では誰がどのような行事を行っているのか（２章）

御嶽講ではどのような行事が行われていたのかを解明することを目的として，活動内容を解明した結果，参加者間の交流が行っていることが明らかとなった．また，こうした行事は，儀礼的側面だけでなく，交流や娯楽としての側面が強いことが明らかとなった．

次に，御嶽講は誰が行っているのかを解明することを目的として，活動主体を解明した結果，3 地域ともに 60 代以上の高齢者によって御嶽講が行われていることが明らかとなった．職業については，大蔵山野において農業従事者以外の参加者がみられた．

研究課題２：参詣講参加者が他の地域組織とどのような関わりがあるのか（３章）

御嶽講参加者が所属する地域組織を解明した結果，大蔵山野がその他２地域の御嶽講に比べ，参加者の所属する地域組織が多様であることが把握された．ここから多様な地域組織の交流が行われていたことが示唆される．

御嶽講を通じた行事の変遷については，2001 年から 2006 年まで休止されており，2007 年からの再開後は，参拝形式が総参りとなっていたことが明らかとなった．御嶽講の参加状況の変遷については，2007 年より御嶽講への参加者の枠を講中以外の地域組織へと広げていた．休止していた御嶽講を参加者の枠を広げて再開させたことにより，属性の異なる自治会役員や囃子会会員，商店街振興会会員が新たに参入していることがうかがえた．

研究課題３：参詣講参加者が地域活動のなかで地域組織とどのような連携を行っていたか（４章）

御嶽講に参加している地域組織は，いずれも神社の行事運営に携わっており御嶽講のよ

うな取り組みは，各地域組織が集まる数少ない機会の１つであり，御嶽講のような講中や世話人，囃子会が集まって旅行する機会は重要であったことが考えられる．また大蔵山野では，御嶽講参加者が祭礼の場で地域組織をまとめる調整役を担っていたことも考えられた．

５−２　既存の研究との比較

既往研究から，池田ら（2005）は田遊びと呼ばれる農耕儀礼を例にとり，地縁型の地域組織を活用し新たな地域組織へと変容させることの可能性を示している．既存の研究は祭礼のような広く住民に対して周知される「解放されたハレ」の場のみを扱った研究が多い．しかし本研究で御嶽講のように，広く地域住民に対して参加が許されず，近代化以前から継続してきたいわば「閉鎖されたハレ」の場が存在することが明らかとなった．また御嶽講のような地域組織が存在することにより，地域コミュニティの形成が円滑に進むことが証明されたことは，これまでの既往研究では指摘されてこなかった．

民俗学や宗教学の観点から御嶽講が，地域コミュニティの形成に寄与することは示されてこなかった．本研究では御嶽講が，神社の行事運営に関わる地域組織の交流を促進することをもって，地域コミュニティの形成に寄与しうることを明らかにしたことから，有益な知見となったことが考察できる．

５−３　参詣講が地域コミュニティの形成に果たしうる役割

本研究の目的は,「都市郊外部における地域コミュニティの形成に果たしうる参詣講の役割を解明すること」であった. 本研究の結果として, 御嶽講が現在でも娯楽の側面を持ち, 神社の行事運営に形成されたつながりが活かされてきたと考えられる.

参詣講参加者は様々な地域組織に所属しており，参詣講参加者同士が御嶽講で交流を行っていた．加えて参詣講参加者は，地域組織をまとめる調整役として役割を果たしていることが明らかとなった．地域コミュニティを形成するうえで課題となっている地域組織の連携に，参詣講が寄与しうることが示唆された.

御嶽講をはじめとする地縁型の地域組織は，地域コミュニティの底流に存在している．大蔵山野では，基盤となり郊外社会のまちづくりが行われているといえる.

５−４　本研究の発展可能性

本研究成果の発展可能性について新しい公共という観点から議論する.

近年,「新しい公共」と呼ばれるある共通の目的の達成を指向するテーマ型の地域組織が注目されている（都市型コミュニティのあり方と新たなまちづくり政策研究会，2011）. 代表的な例として NPO が挙げられる. 図 5-1 は国土交通省が主体となってまとめた今後のコミュニティの理想像である．既存の地域組織である町内会や自治会と新しい地域組織である NPO やサークルとが融合, 連携することが望ましいと述べられている. 従来型の地域組織のなかに，講のような地域組織が当てはまると考えられる.

大蔵山野の事例では，御嶽講のような地域組織を核として，神社の行事運営に関わる地域組織である氏子や囃子会を取り込んできた．新たな公共の存在を利用せずに，地域組織同士の交流が長年続く地域組織を再構築することによって可能となっている.

地域にある資源である従来型の地域組織を今後活用し，まちづくりを行っていくことがこれからの時代に求められる考え方であるならば, 従来型の地域組織を基盤として,「新たな公共」だけに依存しない新しい地域コミュニティ形成のための方策も考えられることが示された.

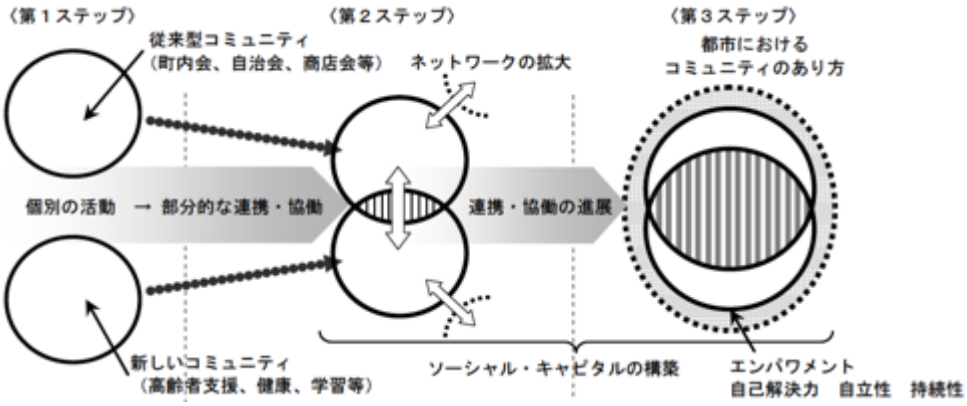

図 5-1．国土交通省によるコミュニティのあり方の概念

都市型コミュニティのあり方と新たなまちづくり政策研究会（2011）より抜粋, pp59

大蔵山野とは異なり，喜多見東部や大蔵本村では，第２章より参加者に農業従事者が多く，参詣講参加者が固定化していることが把握された．こうした地域では，現在でもなお農地が多く残存し，農業従事者が多いことから御嶽講が依然として農業従事者によって行われていることが考えられた．蔦谷（2008）によると，現在就農人口の高齢化が進んでおり，世田谷区（2010）も農業従事者が年代別に 70 代以上が最も多く，高齢化が進行していることを指摘している．よって喜多見東部や大蔵本村でも，農業従事者が高齢化し世代交代が行われないために，御嶽講が衰退していく懸念がある．またこうした現象は，2 地域に限らず一般的な都市郊外部の課題であるといえる．しかし大蔵山野のような例外では，御嶽講を基盤として新たなつながりを形成している．喜多見東部や大蔵本村のような都市郊外部の典型のような場所においても，今後積極的に御嶽講のような地域組織を資源として利用していくことが，地域コミュニティを形成していく活路となると考えられる．本研究は今後の地域コミュニティ形成のための方策となりうる知見を提示した．

５−５　今後の研究課題

本研究は，講のみに着目しているがその他の地域コミュニティとの関係性に関しても考慮する必要がある．また講があったことにより地域コミュニティの形成に対して，具体的にどのような利点があったのかより詳細に調査を行う必要がある．そのためには，同じような環境のもと講が現在でも継続している場所，講をやめた場所で比較を行い，具体的な違いを明らかにすることが有用であると考えられる．

本研究では，都市郊外部における地域コミュニティの形成のための知見としての研究である．しかし事例が少ないことから本研究から一般性を導くことは難しい．都市郊外部に全般における議論へと一般化ができるようさらに対象地を増やし，蓄積を増やしていくことが求められる．

参考文献

藍澤宏，七條典之（1993）：大都市近郊混住地域における地域社会形成に関する研究，日本建築学会計画系論文報告集，449，57-67

福田アジオ，新谷尚紀，湯川洋司，神田より子，中込睦子，渡邉欣雄(2006)：日本民俗辞典，吉川弘文館，pp584

広井良典（2009）：コミュニティを問いなおす，ちくま新書，pp11，pp21

細矢健太郎，鎌田元弘，坂本淳二，青木繁（2002）：混住農村地域における新住民住宅地の空洞化と開発行為の関連性についての考察，日本建築学会計画系論文集（552），177-184

池田佳和，十代田朗，津々見崇（2005）：宅地化地域における農耕儀礼コミュニティーの変容に関する研究，日本都市計画学会都市計画論文集(40)，979-984

石原武政，西村幸夫（2010）：まちづくりを学ぶ，優斐閣ブックス，p70

石川仁生，木下光，丸茂弘幸，長友伸介（2003）：運営形態からみた西条祭りの内発的発展の基礎的条件に関する研究，日本都市計画学会(38)，877-882

伊藤庸一（1987）：近郊農村における地域的な活動単位に関する考察，日本建築学会計画系論文報告集，392，127-135

伊藤庸一(1989)：農村集落における社会集団の重層的な構成に関する考察，日本建築学会計画系論文報告集(403)，105-113

加藤仁美(2012)：まちの居場所-時間と空間-　農村計画学会誌，3，p467-471

加山弾，杢代直美（2009）：地縁型組織とテーマ型組織の連携に関する研究-団地住民の NPO 創出および自治会・管理組合との連携を事例として，東洋大学福祉社会開発研究 2 号，p55-64

加納潤吉，小野良平，熊谷洋一（2002）：目黒川沿川にみる氏子コミュニティの空間構成とその変容に関する研究，ランドスケープ研究 65（5），845-850

鎌田元弘（1987）：大都市周辺地域の混住化類型とその計画的課題に関する考察，日本建築学会計画系論文報告集（375），104-113

鎌田元弘（1987）：都市近郊地域における混住化集落の類型化とその特性に関する考察-その１　地域交流からみた集落の特性，日本建築学会計画系論文報告集（382），87-96

鎌田元弘（1988）：都市近郊地域における混住化集落の類型化とその特性に関する考察-その２　コミュニティ形成の視点からみた新旧住民の混在形式の基礎的検討，日本建築学会計画系論文報告集（393），61-71

鎌田元弘，土肥博至（1991）：集落の類型化による混住化の適合性の評価，日本建築学会計画系論文集，420，49-56

国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会（1969）：コミュニティ生活の場における人間性の回復，国土交通省

三木一彦（2001）：江戸における三峯信仰の展開とその社会的背景，人文地理（53），1-17
三木一彦（2005）：関東平野における三峯信仰の展開-武蔵国東部を中心に-，文教大学教育学部教育学部紀要，39，p63-77
村上心，川野紀江（2007）：集合住宅団地居住者の属性及び再生希望に着目した合意形成意識に関する研究，日本建築学会計画系論文集，619，141-147
根岸亮太，後藤春彦，田口太郎（2007）：祭事が地域運営に与える影響に関する研究　埼玉県秩父市における秩父夜祭を対象として，2007，622，129-136
練馬区(2012)：練馬区における『地域の絆』を深める取り組み～練馬区地域コミュニティ活性化プログラム～を策定，(2014 年 1 月 17 日閲覧)，
http://www.city.nerima.tokyo.jp/kusei/keikaku/shisaku/kumin/chiikicommunity.html
西海賢二（2008）：武州御嶽山信仰，岩田書院，p5-53，p254-255
落合知帆，小林正美（2009）：伝統的な祭りにみる”地域力”に関する一考察　和歌山県田辺市における田辺祭を事例として，都市計画報告集，No.8，80-83
奥田道大（1983）：都市コミュニティの理論，東京大学出版会，p105-106
大谷正幸（2004）：富士信仰から角行系宗教へ　彼らは「新宗教」か否か，宗教研究 78（1），95-118
R.M.マッキーバー（2009）：コミュニティ，ミネルヴァ書房，pp56
桜井徳太郎(1976)：信仰伝承，朝倉書店，pp106
斎藤広子，長谷川洋（2001）：マンション建替えの初動期の合意形成過程とその課題，日本建築学会計画系論文集，543，239-245
佐々木宏幹，宮田登，山折哲雄(1992)：日本民俗宗教辞典，pp178
世田谷区 HP：地域の絆再生支援事業 2014 年 1 月 16 日閲覧，
http://www.city.setagaya.lg.jp/kurashi/101/166/2309/d00033648.html
世田谷区（2010）：世田谷区地域活性化に向けた指針～世田谷らしい地域の絆が支える区民自治・協働，pp3
世田谷区（1999）：ふるさと世田谷を語る大蔵・鎌田・岡本・宇奈根・砧，p169-171
世田谷区（1998）：ふるさと世田谷を語る　祖師谷・成城・喜多見，p63-235
世田谷区（2010）：世田谷区農業振興計画，世田谷区，pp14
世田谷区郷土資料館（1992）：社寺参詣と代参講，p40-46
世田谷区民俗調査団（1987）：大蔵，世田谷区教育委員会，p110-112
世田谷区民俗調査団（1983）：喜多見，世田谷区教育委員会，pp125
澁谷美紀（2001）：「現代の民俗芸能」，農政調査委員会，pp24
敷田麻美（2009）：よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究，国際広報メディア・観光ジャーナル，9，p79-100
杉本容子，鳴海邦碩（2003）：大都市古集落を核とした市街地およびコミュニティの変容

に関する研究，都市計画論文集，38，3,121-126
鈴木栄太郎（1940）：日本農村社会学原理，時潮社，p256-268
高木大資,辻竜平,池田謙一(2010):地域コミュニティによる犯罪抑制:地域内の社会関係資本および協力行動に焦点を当てて,社会心理学研究,26(1),36-45
都市型コミュニティのあり方と新たなまちづくり政策研究会（2011）:都市型コミュニティのあり方と新たなまちづくり政策研究会，pp22
塚佳織，山本信次（2010）:祭礼行事のソーシャル・キャピタルへの影響　岩手県陸前高田市気仙町けんか七夕を事例に，農村計画学会誌　28，231-236
蔦谷栄一（2008）:都市農業を守る　国土デザインと日本農業，家の光協会，pp49
山中弘（2012）:宗教とツーリズム，世界思想社，pp23
山崎亮(2010):新しい祭を契機とした参加型地域づくりにおける新規コミュニティの立ち上げ--栃木県益子町における「土祭」を事例として,農村計画学会誌29(-),329-334
山崎丈夫（2003）:地域コミュニティ論，自治体研究社，pp42
柳田国男（1956）:日本の祭，角川書店，pp216

謝辞

修士論文を執筆するにあたり，多くの方々に大変お世話になりました.

まず指導教員である横張真教授には，２年間を通して大変お世話になりました．論理が一貫していない発表に対して，叱咤激励して頂きました．また研究内容だけでなく研究に取り組む姿勢や普段の生活態度に関しても教えをいただきました．楽勝な生き方はない、必死に取り組んで初めて見えてくるものがある，そうした言葉の１つ１つに私は刺激を受け、研究に取り組む活力となりました.

斎藤先生や山本先生には，研究室の方とは違った視点から本質に関わるコメントを多くいただきました．とくに斎藤先生は，研究室の所属が変更になった私を受け入れてくださり，研究の進め方について理解してくださり寛大に指導して頂きました．また合同ゼミやジョイントゼミの場でも多くのご指摘をしていただきありがとうございました。

研究室の先輩方にも大変お世話になりました. 寺田徹助教, 雨宮護助教, 宮本万理子氏, 渡部陽介氏，石原光訓氏，新保奈穂美氏には普段のゼミでの発表ごとにレジュメや発表内容についてご指導いただきました．渡部陽介氏には，ご就職された後も研究相談の時間を設けていただき，時には励ましの言葉をかけていただきました．宮本万里子氏には，聞き取り調査に同行していただき，調査の進め方について身をもって示して頂きました.

研究室の後輩である山田知奈氏, 徐 露怡氏には, 英語の要旨作成に手伝っていただきました．ありがとうございました.

本郷の横張研究室の皆様にもゼミの場で，的確なコメントを多くいただきました．本郷の方の発表には，いつも論の組み立て方について学ぶ点が多く，ゼミの場以外でも研究についてディスカッションすることができ大変有意義な時間を過ごすことができました.

私の研究は，コミュニティに関する研究であったため，世田谷区の多くの方々にご協力頂きました. 初対面の私に対して、みなさま大変親切にしていただきました．御師の方には配札に連れて行っていただき食事をごちそうになりました.

自然環境学専攻での修士２年間で，自分がいかにできないかを痛感しました．しかし，そんな礼節のなっていない私に対して，みなさま嫌な顔一つせずに研究の進め方から熱心に指導してくださいました．発表の度に結果の羅列になってしまい考察がついてこない私は，皆様が考察につながる解釈の種を示して頂いたおかげで修士論文提出まで到達することが出来たと感じております．深く感謝致します.

最後に，これまで 23 年間もの長期にわたり，勉強や研究に専念できるように支援をし続けてくれた家族に深く感謝しております．23 年間，常に温かく見守って頂き本当にありがとうございました.

2014 年 1 月　山田　修栄